

『おそれとおののき』における殺人の意味

馬場翔太郎

序

『おそれとおののき』 *Frygt og Bæven* (以下『畏れ』) はセーレン・キェルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855) によって1843年10月16日に、仮名著者沈黙のヨハネネスの名で刊行された。この書では創世記二十二章一節から十九節のアケダー*1と呼ばれる箇所を題材にして、「信仰」とは何か、が論じられている。アケダーは、アブラハムが神の命令に従って自分の息子イサクを神に捧げようとした物語である。この物語がはらむ難点は二点に大別できる。一つ目は神の約束が一貫しない点である。イサクは一族繁栄を約束する子として神がアブラハムに与えた子であるため、イサクを捧げよという神の命令

〈注〉本論文は、キェルケゴール協会第 19 回学術大会研究発表「レギーネ問題と『おそれとおののき』—罪人の愛の現れとしての離別—」(2018年7月1日、東洋大学白山キャンパス)の原稿内容について、大幅な加筆・修正したものである。キェルケゴールのテキストは以下のものを使用した。

Søren Kierkegaards Samlede Værker. Tredie Bind. Anden Udgave, Kjøbenhavn, Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag. 1921. Udgivne af A.B.Drachmann, J.L. Heiberg og H.O.lange.

Søren Kierkegaard Samlede Værker. Bind 5. Gyldendal. 1968. Tekst og Noteapparat gennemset og ajourført af Peter P. Rohde.

Søren Kierkegaards Papirer, Anden forøgede Udgave ved NielsThulstrup, Udgivet af Det danske Sprog- og Litteraturselskab og Søren Kierkegaard Selskabet. 1968-78. Gyldendal. København.

キェルケゴールのテキストの引用・参照に際しては、本文中に(デンマーク語版全集第二版の巻数, 頁数)の形で示した。デンマーク語原典第三版を指示する場合は(S.V. 巻数, 頁数)、日記を指示する場合は(Pap. 巻数, 巻数区分, エントリー数)の形で示した。引用文中□によって括られた部分は論者による補足であり、引用文中の…は省略である。なお訳文は創言社『キェルケゴール著作全集 第三巻』を参考にした稚訳である。必要に応じて訳文の間にデンマーク語を付記した。

*1 9 節でアブラハムがイサクを縛って神に捧げようとしたことから、しばしばヘブライ語でアケダー ('aqedah) と呼ばれる。

は先の約束を神自ら反故にしているように思われる。二つ目は神の命令と道德との対立である。神の命令によって殺人が正当化されると共同体を成り立たせている道德的秩序が破壊され、人間関係の構築が阻害される。『畏れ』の解釈に際しては、これらの二点のうち、後者に力点が置かれてきたと思われる。例えばレヴィナスは、「キルケゴールにあっては、…実存が倫理的段階とみなされていたものとどまることができず、宗教的段階に、信仰の領域に入り込むまさにそのとき、暴力が生じる」*2と述べて、キルケゴールの信仰は倫理を踏み越えるような暴力性を持っていると見なし、さらに、この暴力性に含まれる倫理の軽視という発想がニーチェ以降の反道德主義に結びついている*3と考える。

確かに『畏れ』「問題Ⅰ」では倫理との対立でアブラハムの信仰が論じられているが、『畏れ』は単に道德を否定しているのではない。というのも、アブラハムは実際にはイサクを殺さずに済んだからである。そこで本論文では『畏れ』の精読と「歴史的方法」を用いた解釈によって『畏れ』における殺人の意味を明らかにし、レヴィナスからの批判に応答したい。

第一章 『畏れ』における実存段階

キルケゴールはしばしば、審美 (Æsthetik)、倫理 (Ethik)、信仰 (Tro) の三つのカテゴリーを用いて議論を展開している。『畏れ』においても「問題Ⅲ」でこれら三つのカテゴリーを登場させている。『畏れ』では、審美は沈黙 (Taushed) を要求するもの、倫理は開示 (Aabenbarelse) を要求するもの、信仰は逆説 (Paradox) として描かれている。さらに問題Ⅲでは、倫理と信仰の間に「悪魔的なもの (det Dæmoniske)」がある。本章ではこれら四つの概念を考察することを通して、それぞれの実存段階における殺人の意味を明らかにしたい。

*2 エマニュエル・レヴィナス『固有名』合田正人訳、1994年、みすず書房、111頁。

*3 同書、112頁。

第一節 審美

キェルケゴールは以下の例を用いて審美を説明する。

ある少女が秘かにある人と恋に落ちる、だが彼らはまだ自分たちの愛を決定的に互いに打ち明け合っていない。両親は彼女に別の男と結婚するように強制する…、彼女は両親に従う（Ⅲ, 148）。

そして「家族全体の体面を汚す」（*ibid.*）ことを避けるために、ひそかに愛し合う男女は自分達の気持ち、すなわち結婚したいという意図を隠しておく。このとき彼らは、外面上は自分達の意図よりも彼女の両親の意図を優先し、沈黙するのである。時がくれば彼女の両親の考えたような結婚が成立し、男女のひそかな意図は破れ去るだろう。こうして意図と意図の対立が解消することもある。だが審美は「偶然（*Tilfælde*）」の助けによって別の仕方での対立を解消する。審美の領域にのみ属している「偶然」は、彼らのひそかな意図を明らかにする。隠されていた意図が明らかにされると二人は夫婦になる（*ibid.*）と述べられていることから、彼らの意図が偶然にも明らかになったならば、それ以上彼らの意図を隠そうとはせず、彼女の両親との意図の対立に向き合うことになるといえる。このように、審美の沈黙は何かがあっても意図を隠しておくとするのではなく、積極的に対立を明らかにしないだけの暫定的な沈黙なのである。

ところで、この審美の議論は『畏れ』で論じられる実存構造にとって重要な要素である「障害」を含んでいる。J. Davenportは『畏れ』のアブラハムの信仰に必要な要素を六つ挙げているが、その一つに「障害（*obstacle*）」^{*4}がある。

^{*4} 彼によればアブラハムの信仰を成立させている要素は、1 倫理的理想、2 障害、3 無限の諦め、4 神的約束、5 背理、6 権威、の六つである。「障害」において「何らかの不幸や問題、あるいはある種の状況によって、人間の行為者が彼の倫理的理想を達成し獲得することから妨げられる。そしてそのような不幸や問題、状況は行為者が自分の力で理想を獲得することを彼にとって不可能にしている。」という（Davenport, John. 2015. "Eschatological faith and repetition: Kierkegaard's Abraham and Job." In *Kierkegaard's Fear and Trembling*. Cambridge: Daniel Conway, pp. 82, 83.）。

先の男女の例では、両親の意図が「障害」にあたる。実存段階によって「障害」の乗り越え方が違うことに注目しつつ論を進めたい。

第二節 倫理

審美は暫定的な沈黙を要求するのに対して倫理は開示を要求し、「現実のあらゆる苦難と戦う勇気を持つべきことを命じる」(Ⅲ, 149)。先のひそかに愛し合う男女の例でいえば、偶然が彼らの意図を明らかにするのを待たずに、彼らが自ら自分達の意図を開示して彼女の両親の意図と対決することを要求するのが倫理なのである。『畏れ』において、審美と倫理の差異はエウリピデスの『アウリスのイピゲネイア』を題材として論じられる。この物語の中で、ギリシア王アガメムノンには、戦争における自国の勝利のためには彼の娘イピゲネイアを神への生贄としなければならないという神官のお告げを受け、それを実行する。彼は自分の娘の生命よりも国の勝利を優先させるという意図を持っている。この意図に対立するのは、イピゲネイアを殺させないという意図である。従ってアガメムノンが戦うことになる「あらゆる苦難」とは、生贄をやめさせようとする人々であると考えられる。もしアガメムノンが審美の領域で行動するならば、彼の殺人の意図が隠されている限り彼は国が敗れるのを放っておくが、偶然にもその意図が明らかになる時には、彼は娘を捧げて国を勝利させる。他方でアガメムノンが倫理の領域で行動するならば、偶然の助けを待たずに自ら進んで、生贄を止めさせようとする人々との争いに進んでいくのである。

第三節 逆説における沈黙

さて、倫理の先では「絶えず逆説に、神的 (guddommelig) 逆説と悪魔的 (dæmonisk) 逆説に突き当たる」(Ⅲ, 151)、そしてこれらの二つは沈黙である (ibid.) と言われる。審美の沈黙は一時的なものであり、開示を喜んで受け入れる沈黙であったが、これら二つの逆説における沈黙は別の性質を有している。本節では悪魔的逆説、神的逆説の順に考察を加えたい。

まず、『畏れ』における「悪魔的なもの」(det Dæmoniske) という語の意味を明らかにしたい。「問題Ⅲ」の中で「悪魔的なもの」の例として挙げられて

いるのはトビト記のサラの物語である。サラは七人の男に嫁いだが、その都度夫を悪魔アスモダイに殺されるという不幸な状況を負っている。トビト記では神の使いに促されたトビアがサラと結婚し、救いを求めて二人で神に祈る。そしてトビアは殺されずに済むのである。キェルケゴールはトビアが現れる前の、不幸な状況にあるサラを取り上げて次のように述べる。

サラの立場に一人の男を置いてみよう。そして彼に、もし彼が少女を愛そうとすれば、地獄の霊がやってきて、婚礼の夜に恋人を殺すということを知らせるとしよう。このとき、彼が悪魔的なものを選ぶということは、恐らくあり得ることであろう。彼は自分の中に閉じこもって、悪魔的性格の人がひそかに語るのと同じような仕方で、こんなふうにはなぐさめよう、
「ありがたや、私は儀式や大袈裟なことはまっぴらだ、私は愛の喜びなど少しも望まない。私は少女たちが婚礼の夜倒れるのを見て楽しむような青髭の騎士にもなることができるのだ」と（Ⅲ, 169）。

この箇所を解釈するに当たって、「悪魔的なもの」という用語の意味を明らかにしたい。この語はトビト記の悪魔アスモダイを指す語ではなく、キェルケゴールが著作活動全体を通じて使用する語である。Drachmannによれば、悪魔的なものには「閉塞性即ち〈顕なもの〉の欠落」と「善に対する不安」という特徴がある*⁵。閉塞性という特徴を考慮すれば、先の引用の男の眩きは、殺人についての自身の異常な快楽傾向の表明ではなく、誰とも結婚しないことの卑屈な表現であると理解できる。

さらにここで「もし彼が少女を愛そうとすれば」と言われていることに注目したい。彼が彼女との結婚を意図するとしても、彼女が死んでしまえばその結婚は実現されない。この場合、彼の意図の実現を妨げるのは彼が負っている状況であるといえる。審美や倫理の場合には、ある意図の実現を妨げるのは別の意図であり、戦いは意図と意図との間で引き起こされた。悪魔的なものにおいては、行為者の意図を妨げるのは状況なのである。かの男が結婚を意図し、そ

*⁵ S.V. 20, 51-52。

れを開示したとしても、結婚は現実のものとはならない。彼が結婚しようとするとその相手が死ぬという状況では、彼が誰かと結婚することは不可能である。このように、決して実現されないような意図が存在する場合に、その意図を卑屈に否定し沈黙することが悪魔的なものにおける沈黙である。この沈黙は暫定的なものではなく、意図が明らかになることを望まない沈黙である。

トビト記のサラは夫を七度失った後に女奴隷からそのことを非難され、自身の境遇を嘆いた。もしこの境遇がなければサラは結婚を望むのであり、結婚がサラの意図である。しかしサラがこの境遇の中にいる限り、彼女は結婚を望んでいるという彼女の意図を隠して沈黙する。もしサラがトビト記の話とは異なって、悪魔的なものに支配されていたなら、トビアが彼女に結婚を申し込んだとしても、彼女はそれを拒否しただろう。なぜなら結婚することは彼女にとって夫を殺すことを意味しており、彼女は夫を失うことを恐れるからである。サラは結婚したいという意図について沈黙するが、そのことによって愛する者を生かすのである。ケルケゴールが「ある意味では悪魔的なものの中には、平凡な人間の場合よりも無限に多くの善が宿っている」(Ⅲ, 161)と語るのはこの意味であろう。

それでは、サラはこの状況からどのようにして救い出されるのだろうか。サラが「結婚すれば夫を失う」という状況から抜け出すためには、彼女が「夫を失わない結婚」をすることが必要である。だが彼女が悪魔的なものに囚われて結婚を拒否し続けるなら、彼女がこの状況から抜け出すことは決してできない。もし彼女がこの状況から抜け出すことを欲するなら、愛する者に死の危険を与えなければならない。これが悪魔的なものの信仰における殺人の意味であろう。

また、悪魔的なものの別の例として「魚人とアグネーテ」という物語が語られる。この魚人は「前世においては人間」(Ⅲ, 160)であったと想定されており、彼は何らかの業によって魚人となったと思われる。そしてアグネーテは人間の少女である。それ故、アグネーテにとって魚人は異質な要素を含んでいる。この魚人の救済について次のように言われる。

単独者が自分の責めによって普遍的なものの外にでてしまった場合には、彼は、単独者として絶対的なものとの絶対的關係に入ってしまうことでは、普遍的なものに立ち帰ることはできないのである（Ⅲ, 162）。

この引用中の普遍的なものは魚人とアグネーテにとっての人間の世界を意味していると思われる。そして単独者とは魚人となって人間の世界から閉め出された者を指している。彼が人間の世界に帰るためには「単独者として絶対的なものとの絶対的關係に入」ることが必要であるが、これは「逆説」（*ibid.*）と言い換えられている。そしてこの逆説は信仰の逆説であるという*⁶。従って、魚人は信仰によって救済され、人間に戻ることができると考えられる。しかも「アグネーテと結婚する」（*ibid.*）ことを通して救済されるのである。この結婚における難点は魚人とアグネーテの住む世界が違うことである。もし二人が一緒になったとしても、魚人が人間の世界に戻ることができなければ、二人は水の中に閉じこもって生きるしかない。そうなればアグネーテを溺れさせて殺してしまうことになる。このように考えれば、魚人はサラと同様に、結婚しようとする相手を殺してしまう状況に陥っているといえる。魚人にとって、アグネーテと結婚することは彼自身が救済される可能性を意味すると同時にアグネーテを殺してしまう可能性をも意味している。そして彼には結婚がどちらの結果を生むかがわからないのである。この不確実性を前に救済の可能性を選択することが信仰の逆説に訴えることであり、「単独者として絶対的なものとの絶対的關係に入」ることであろう。そしてサラや魚人が直面するこの信仰の逆説が「悪魔的逆説」の意味するところだと考えられる。

しかしながら、こうして示されたサラや魚人の信仰はアブラハムの信仰とは異なるものである。というのも、「わたしには、アブラハムは理解できないが、魚人なら理解できる」（Ⅲ, 163）と言われ、魚人とアブラハムが明確に区別されているからである。この区別の理由として「アブラハムは罪*⁷によって単独

*⁶ S.V. 5, 269.

*⁷ 『畏れ』における罪は、宗教的に扱われるというよりも形式的に扱われていて、普遍的なものの中に入っていないことを罪と呼んでいる（Ⅲ, 117）。

者になったわけではない」(ibid.) ことが挙げられる。すなわち、アブラハムは魚人やサラと異なり、そこから抜け出したいと思うような困難な状況を負っていない。サラにとって結婚はトビアを危険にさらすことであると同時に、彼女を救済することを意味していた。しかしアブラハムのイサク奉獻はイサクを危険にさらすのみであり、イサク奉獻によってアブラハムは何らかの利益を得ることを期待できない。従って、アブラハムの行為は利己的な行為でずらなく、ただ神の命令に従うことが目的になっているのである。アブラハムはイサクを捧げなくともイサクを保ち続けることができるのに、わざわざイサクに危険を与える。サラや魚人の行為は、彼ら自身の救済という観点から理解されるが、アブラハムは困難な状況にないため彼の行為は理解されない。アブラハムの行為を我々は理解できないということ、これがアブラハムの沈黙なのである。「神的逆説」はこのようなアブラハムの信仰を指していると考えられる。

以上で各カテゴリーが考察された。審美と倫理は暫定的な沈黙の有無によって区別されたが、どちらの場合も、ある意図と別の意図の対立をテーマとしていた。悪魔的なものにおいては行為者の意図と彼をとりまく状況が対立していた。彼の沈黙は愛する者を生かすためであり、彼の信仰は、他者を危険にさらしながらも自己の救済を求めることであった。そしてアブラハムの信仰は理解不可能なものとしての沈黙であった。『畏れ』「問題Ⅲ」は以上のように、審美、倫理、悪魔的なものの沈黙、悪魔的なものの信仰、アブラハムの信仰の五段階に区分されたのである。

第二章 「歴史的方法」による『畏れ』解釈

キェルケゴールを研究する際に用いられる手法の一つに「歴史的方法」がある。この方法はキェルケゴールの著作だけを研究するのではなく、彼の遺稿や日誌、当時のデンマークの時代状況といった彼の著作活動の背景を踏まえることによって、著作の理解をより深めようとする研究方法である。この方法の日本に導入された当時の意義は、橋本が詳しく論じている*8ように、ドイツ神学及び哲学経由でもたらされたキェルケゴール像からの脱却、そして日本の研究者

*8 橋本淳『キェルケゴールにおける「苦悩」の世界』1976年、未来社、19-36頁。

の主体的関心による独自解釈の修正にあった。この方法は日本でも40年以上の伝統を持っているが、決して過去の方法論ではなく、創言社『キェルケゴール著作全集』の『畏れとおののき』の解説でレギーネとの関係が読み込まれていること、概説書ではキェルケゴールの思想形成との関連でレギーネ関係が触れられている*9こと、近年でも橋本の「歴史的方法」の流れをくむ研究書が出版されている*10ことから考えて、現在でも有効性を持つ手法であるといえる。本章ではこの「歴史的方法」を用いてレヴィナスからの批判に応答することを目指す。

第一節 従来の「歴史的方法」よる解釈

まず初めに従来の「歴史的方法」による解釈を整理したい。『畏れ』のアケダーの物語についての従来の解釈は以下の二つのグループに大別できる。(1) イサクの奉獻とレギーネとの婚約破棄を対応させる解釈。(2) セーレンは父ミカエルの罪を受け継いでおり、セーレンはその贖罪という役目を負っているという解釈。

これらの解釈の前提として、レギーネ問題及びセーレンの父ミカエルとの関係を確認したい。まずレギーネ問題についてである。『おそれとおののき』は1843年10月16日に、『反復』と同時に出版されたが、この二つの著作が執筆された背景にはレギーネ問題がある。キェルケゴールは1840年9月にレギーネ・オルセンと婚約した。だがこの婚約は翌年8月に彼が婚約指輪を彼女に送り返すことによって破棄された。破局以降、彼はレギーネとの関係を断絶するような行動を取るのであるが、1843年4月の復活祭の夜、教会でレギーネから二度うなずきかけられたことに衝撃を受け、『反復』と『おそれとおののき』の執筆を開始する。そこでレギーネとの復縁に対する期待からこれら二つの著作が書かれたのであると考えられている。この婚約破棄が研究者によって取り上げられる理由として、キェルケゴールの日誌記述の中に愛情と信仰の葛藤が見受

*9 大屋憲一・細谷昌志編『キェルケゴールを学ぶ人のために』1996年、世界思想社、112-116頁、及び須藤訓任責任編集『哲学の歴史9』2007年、中央公論新社、247-250頁。

*10 鈴木祐丞『キェルケゴールの信仰と哲学』2014年、ミネルヴァ書房。28頁参照。

けられるという点が挙げられる。それは次の日誌記述に表れている。

私の罪は信仰を、神にとっては全てが可能であることについての信仰を持っていなかったことである。しかしどこに神を試みることとの境界があるのか。だが私の罪は彼女を愛していなかったことでは決してない (Pap. III, A, 166)。

この日誌は破局直後の1841年10月のもので、この日誌を根拠にして、破局は、キェルケゴールがレギーネを愛していたけれども神への信仰を持っていなかったために起こった、と説明される。こうした信仰と愛情との関係が、『畏れ』解釈の「歴史的方法」において用いられてきたのである。

また、レギーネ問題より以前にキェルケゴールと彼の父ミカエルとの関係が彼の思想に影響を与えたと考えられている。キェルケゴールの日誌記述には、時期を問わず彼が心に抱いている憂愁が散見されるが、この憂愁は一時的な気分ではなく、父ミカエルの罪意識から来るものであると考えられている。父ミカエルの罪には諸説あり、彼が幼い頃に荒野で神を呪ったことであるとも、彼が婚前交渉によって子供を設けたことであるとも言われているが、肝要なのは、父ミカエルは自身の罪の贖罪のために息子のセーレンに厳格な宗教教育を施し、牧師として神に献身させようとしたことである。キェルケゴールが父ミカエルのこうした意識を知り、彼の家の下されている神の罰を意識したことは、1838年5月5日の日誌から読みとられている。

(1) について。例えば藤野寛は『畏れ』に関して、「殺人を禁じる倫理的ルールでさえも、信仰のある局面においては棚上げにされるということがありうる、とキェルケゴールは考える。キェルケゴール自身の体験に即して言えば、レギーネを無慈悲・不条理に捨て去り、傷つけたという行為がそれにあたるだろう」*¹¹と述べている。この解釈は他にも、尾崎*¹²、V. Rumble*¹³に見られる。ま

*¹¹ 須藤訓任責任編集『哲学の歴史9』2007年、中央公論新社、250頁。

*¹² 「苦悩に満ちた信仰において恋人レギーネを生贄としたキェルケゴール」(『キェルケゴール著作全集 第三巻』2010年、創言社、744頁)。

*¹³ Rumble, Vanessa. 2015. "Why Moriah?: weaning and the trauma of transcendence in

た、キェルケゴールは信仰によってレギーネと復縁することを望んでいたという解釈^{*14}は、婚約破棄によってレギーネを生贄とした彼がレギーネを再び受け取ることを意味しているため、この解釈の一つと数える。この解釈では、信仰がレギーネへの愛情を断念させたと考える。これをアケダーに当てはめれば、イサクを殺せという神の命令をイサクへの愛情よりも優先させることである。これはまさに宗教的なものを倫理的なものよりも優先させるというレヴィナスのキェルケゴール批判と合致する解釈である。

(2) については、大谷愛人がマランチュクの言を引用し、婚約破棄の「理由は、キェルケゴール自身が生けにえとして献げられた者であるので、もしレギーネと結婚するならば、レギーネをも生けにえに献げなければならなくなる、というものである」^{*15}と述べていることがその一例である。この解釈は他にも、國井^{*16}、鈴木^{*17}に見られる。この解釈の特徴としてキェルケゴールを信仰者アブラハムに到達できない者、すなわち信仰を持たない者と捉える点が挙げられる。というのもアブラハムは罪を持たないのに対してキェルケゴールは父から引き継いだ罪をもっているからである。

第二節 日誌記述による吟味

さてそれではこの二つの解釈の内、どちらがより妥当な解釈であるのか。

Kierkegaard's *Fear and Trembling*." In *Kierkegaard's Fear and Trembling*. Cambridge: Daniel Conway, p. 260.

* 14 例えば大屋は、『畏れ』と『反復』を関連させつつ「この書 [= 『畏れ』] において、彼は信仰の逆説たるを強調したのであるが、この信仰の問題はまた、『反復』においては、彼の神と共なる念々の歩みの中に、失われたレギーネとの関係が取り戻されることを念じながら、展開されることになる」(大屋憲一・細谷昌志編『キェルケゴールを学ぶ人のために』1996年、世界思想社、189頁)と述べる。また、榊田も同様である(榊田啓三郎訳『キェルケゴール著作集 第五巻』1962年、白水社、355頁参照)。

* 15 大谷愛人『キェルケゴール著作活動の研究(後篇)』1991年、勁草書房、979頁。

* 16 「おそらく彼 [= キェルケゴール] は、父親の犯した罪、それを背負っている彼の家族、とりわけ彼自身が生贄として神に供される宿命を負っていること、さらには彼自身の犯した過ち、これらのものを前提として背負ったまま、若い無垢な娘と結婚することを神が許すはずはない、と確信していたのである」(國井哲義『苦悩と愛 キェルケゴール論』2002年、創言社、15頁)。

* 17 鈴木前掲書 58頁参照。

キェルケゴールの日誌を用いてこの問いに答えたい。前述の日誌記述 (Pap. III, A, 166) ではキェルケゴールが信仰を持っていなかったと自己理解していることが確認できた。同じことが『畏れ』執筆直前の1843年5月17日の日誌からも読み取れる。

私が信仰を持っていたら、私はレギーネのもとに留まっただろう (Pap. IV, A, 107)。

実際にはキェルケゴールはレギーネのもとを去っているのだから、キェルケゴールは信仰を持っていなかったことになる。以上の二つの記述を合わせて考えれば、キェルケゴールは自分が信仰を持っていないという自己理解の上で『畏れ』を執筆したといえる。この考察は (2) を支持している。ではこの場合の「信仰」とは何を意味しているのか。この「信仰」が『畏れ』のアブラハムの信仰を意味しているとするならば、信仰者は愛する者を犠牲に捧げつつ、神からその愛する者を再び受け取る人であるといえる。ここで重要なことは、信仰者は、愛する者を犠牲に捧げるという契機とその愛する者を再び受け取るという契機の二つの契機を共に備えているということである。先の日誌記述に立ち戻ろう。キェルケゴールは信仰を持っていたらレギーネのもとにいた、言い換えればレギーネと結婚したといえる。この時、キェルケゴールは信仰者なのであるから、キェルケゴールは愛する者を犠牲に捧げるという契機とその愛する者を再び受け取るという契機の二つの契機をどちらも備えていることになる。すなわち、レギーネと結婚するということの中に、レギーネを犠牲にするという契機が含まれているといえるのである。

本論文が (2) を支持するとしても、(1) の解釈を乗り越えるためには『畏れ』で論じられている道徳と宗教の対立を説明する必要がある。この対立を考察する際の手がかりとなるのは、國井による信仰の二つの区別である。國井は日誌記述 (Pap. III, A, 166) からキェルケゴールは信仰を持っていなかったことを認めながらも「彼は信仰を持っていた」*¹⁸とも述べる。キェルケゴールの「罪

*¹⁸ 國井前掲書 14 頁。

は、レギーネを愛していなかったということではなくて、神の絶対的な愛に対する信仰を持っていなかったということ、彼の信仰が結婚の障害となるような段階にとどまっていたということなのである」*¹⁹と國井は説明する。すなわち國井は信仰を二つに区分している。一つ目は結婚の障害となって人間関係を破壊する段階の信仰、もう一つは結婚を可能にするような信仰である。これらはアブラハムの場合にはそれぞれ、イサク奉獻を命じる神に対する信仰とイサクを返し与える神に対する信仰になる。道徳と宗教が対立するのは、信仰が一つ目の意味においてのみ考えられた場合である。(1)の解釈はこの観点に立っているといえる。しかし『畏れ』の信仰は一つ目の信仰の先に二つ目の信仰を考えているため、(1)の解釈は『畏れ』の信仰についての一面的な解釈であるといえる。従ってレヴィナスの批判に対しては、レヴィナスは『畏れ』に現れている信仰あるいは宗教の概念が一つ目の意味の信仰のみであると考えていたために、倫理と宗教との対立にのみ注目していた、と答えることができる。

第三項 悪魔的なものとしてのキェルケゴール

この信仰の二区分はキェルケゴール自身とどのように関係しているのか。(2)の解釈に従えば、キェルケゴールとレギーネの婚約時の状況は次のように表現できる。キェルケゴールはレギーネとの結婚を望んでいたが、彼の罪意識が障害となって結婚に踏み切ることができなかった、と。この状況は我々が第一章で考察した「悪魔的なもの」と同じ構造を持っているといえる。実際、Drachmanは魚人とキェルケゴールを重ね合わせて理解している*²⁰。キェルケゴールにとってレギーネと結婚することは彼女を犠牲に捧げることを意味する。そして本論文の解釈では「悪魔的なものは結婚を避け、結婚したいという意図について沈黙するが、その代わりに愛する者を生かすのである」という表現をキェルケゴール自身へ適応し、婚約破棄の理由は、レギーネにキェルケゴール家の贖罪のための生贄という役目を負わせないようにするためであると考える。そしてキェルケゴールがレギーネとの結婚によって手に入れたいと望

*¹⁹ 國井前掲書 15 頁。

*²⁰ S.V. 5, 268, 269-270。

んでいた信仰とは「悪魔的なものの信仰」であり、彼の状況に適用するなら、レギーネとの結婚は彼女をキェルケゴール家の贖罪のための犠牲と為すことになるが、神が罪を赦し、キェルケゴールとレギーネの二人を生贄という役割から解放することであるといえるだろう。このことから考えて『畏れ』における宗教性の二区分は、当時の彼が欲していた信仰と当時の彼が持っていた不完全な信仰の間の不一致を反映していると考えられる。彼が信仰へ進みたくても進めない最後の地点が悪魔的なものの沈黙の段階だったのである。

このように『畏れ』に登場する「悪魔的なもの」をキェルケゴール自身の状況に当てはめて考えることは、(2)の解釈を一步進める解釈になる。(2)の解釈において、例えば大谷は『畏れ』について、この著作は、アブラハムという到達不可能な理想を掲げることによって旧約的信仰の不可能性を示し、後の著作における新約的な救いへ注意を向けさせることを意図していると考えている*21。すなわち、大谷は『畏れ』にはキリスト教の信仰についての積極的な主張が書かれていないと理解しているのである。しかし、「悪魔的なもの」がキェルケゴール自身の状況を表しているとすれば、悪魔的なものの信仰に積極的な主張を見出すことができるだろう。後期の著作『死にいたる病』においても「悪魔的なもの」が問題にされている。そこでは「自己の罪について絶望する罪」が悪魔的なものの働きであるといわれており、後期の思想においても「悪魔的なもの」は重要なテーマであるといえる。それゆえ「悪魔的なもの」は、罪人の救いというキリスト教的な発想の萌芽として、『畏れ』に現れているといえるのではないだろうか。

結

本論文は『畏れ』の精読と「歴史的方法」を用いた解釈によって、『畏れ』には、審美、倫理、信仰という三つのカテゴリーではなく、審美、倫理、悪魔的なものの沈黙、悪魔的なものの信仰、アブラハムの信仰という五つのカテゴリーが存在すること、また『畏れ』執筆時のキェルケゴールは「悪魔的なものの沈黙」の段階にいたことを示した。そして「悪魔的なもの」が直面する殺人

* 21 大谷前掲書 1006、1007 頁参照。

とは、自分自身が困難な状況から抜け出すためには愛する者を危険にさらさなければならぬことであった。さらにこれら二つの考察から、『畏れ』において宗教という概念が二つに区分されることが論じられ、それによって、「レヴィナスは『畏れ』に現れている信仰あるいは宗教の概念が単一であると考えていたために、倫理と宗教との対立にのみ注目していた」とレヴィナスに対して応答することが可能になった。「悪魔的なもの」の概念は後期著作との繋がりが示唆されたため、この概念を手がかりにして前期著作におけるキェルケゴールのキリスト教理解へ接近することを今後の課題としたい。